

2025年本屋大賞受賞！ 小説家阿部曉子さん特別インタビュー

4月9日、2025年本屋大賞の発表が行われ、本市出身の阿部曉子さんの小説『カフネ』が大賞に選ばれました。

「本屋大賞」とは、2004年に設立された、全国の書店員が一番売りたい本を投票で選ぶ文学賞で、本県出身の作家では初の受賞となります。受賞を記念して、特別インタビューをお送りします。
(聞き手 市広報係)

―本屋大賞受賞おめでとうございます。受賞から少し日が経ちましたが、今のお気持ちは？

阿部 なかなか受賞の実感が湧かなかったんですが、周りの人たちがお祝いの言葉やお花を贈ってくださって。想像以上に喜んでくれる皆さんの姿を見ると、受賞して良かったなという気持ちで湧きました。

―『カフネ』のストーリーが生まれたきっかけは？

阿部 7年ほど前に講談社の編集さんから「疑似家族ものを書かないか」と提案がありました。「死んだ男性の姉と元恋人」というテーマも合わせていただいた時に、小説冒頭のカフネのシーンが思い浮かんだのがきっかけです。

―なぜ、タイトルを「カフネ」に？

阿部 「カフネ」という言葉は、友人にももらった本『翻訳できない世界のことば』で知りました。愛する人って、恋人以外に家族もあり得るし、いろんな可能性があると思います。本作で書いたのは一つの言葉で表現できない人間関係ですが、それを「カフネ」という広がりのある言葉が包み込んでくれると思い、タイトルにしました。

―料理が印象的な本作。作中に出てくる料理は、ご自身で考えられたのですか？

阿部 そうですね。想像しながら料理を書くこともあるし、落として形の崩れてしまったケーキにアイスを乗せて食べたとか、友人とお酒を飲みすぎた翌日に友人が作ってくれた素麺そうめんがおいしかったとか、自分の経験を生

『カフネ』 阿部曉子 作(講談社)
最愛の弟が急死した。姉の野宮薫子は、遺志に従い弟の元恋人の小野寺せつなと会うことになる。その場で倒れた薫子を家に送り届けたせつなが振る舞ったのは、それまでの彼女の態度からは想像もしなかったような温かい手料理だった。
二人の「家事代行」が会おう人びとの暮らしを整え、そして心を救っていく。



※カフネ：愛する人の髪にそつと指を通す仕草を表すポルトガル語

かして書くこともあります。

―阿部さんにとって「思い出の味」はありますか？

阿部 子どもの頃、風邪をひくと作ってもらった、出汁でいじがたっぷりのフルフルとした茶碗蒸しです。卵って、身近で体に良くて元気になりたいときに食べたりしますよね。作中に、身近な食材で作れる料理を出したんですが、オムライスやプリンなど卵を使った料理が出てくるのは、その思い出があるからかもしれません。

―作中に東北を感じさせる表現が出てきましたが、意識的に入れているのでしょうか？

阿部 本作はコロナ禍での執筆で、取材がまったくできなかったんです。でも、小説の細部には自分の知っている事や経験している事なるべく書きたい。だから、これまでの人生で触れてきた事を小説に入れていきました。

―何歳から小説を書いていましたか？ また、小説家を目指すとしたきっかけは？

周りの皆さんが喜ぶ姿を見て、
受賞して良かったなと実感が湧きました



写真提供：講談社

阿部曉子(あべ・あきこ)
花巻市出身、在住。2008年『屋上ボーイズ』(応募時タイトルは「いつまでも」)で第17回口マン大賞を受賞しデビュー。著書に『どこよりも遠い場所にいる君へ』『また君と出会う未来のために』『パラ・スター〈Side 百花〉』『パラ・スター〈Side 宝良〉』『金環日蝕』『カラフル』などがある。

―最後に、小説家を目指している花巻の子どもたちへ一言。

阿部 高校生の時、賞に応募する小説を書くために冬休みの宿題をやらなくて、先生にものすごく怒られたことがあります。なので、夢を追いかけるのとはとても良いことだけど、学校の宿題はちゃんとやるんだよ(笑)。



▲花巻図書館に設置しているメッセージボード。メッセージカードを貼り付ける際は図書館スタッフにお声がけください



イトルにしました。

阿部さんは、現在『カフネ』のスピノフ作品を執筆中とのこと。今後も阿部さんの活躍に注目です。

市では図書館事業として、8月に阿部曉子さんのトークイベントを開催予定です。詳しくは決まり次第、広報はなまきや市ホームページでお知らせします。

また、花巻図書館では8月30日まで企画展示を開催中。阿部さんの過去作や、本屋大賞候補者の著作などを紹介しています。花巻図書館入り口には、阿部さんへのメッセージボードも設置。ご来館の際は、ぜひメッセージをお寄せください。